

【静岡県在住被害者の母のコメント】

静岡県の被害者の母です。薬剤師として、調剤業務に携わっています。

現在18歳になる次女が被害を受けました。次女は2017年、16歳のときにガーダシルを2回接種しています。現在、記憶障害もあり、体調も悪く、自身で話すことができませんので、私が代わりにお話をさせていただきます。

長女がワクチンを接種したあとに、重い副作用が多くの方に出たと報道があり、次女が接種年齢となっても、初めは怖くて接種を見合わせていました。私が受けた定期検診先では「子宮頸がんはワクチンで防げる唯一のがんです」と、ワクチンを勧める大きなポスターが目に残りました。副作用の騒ぎの後、現在ワクチンはどうなっているのかと気になり、保健所や区役所に尋ねると、「積極的に勧めていないが、あくまで一時的な処置で、ちょうど少し前に名古屋で大規模な調査が行われ、因果関係がなかったと証明されたので、今まさに積極的な接種に移行する準備を進めている」という話でした。医師からも同じような説明を受け「安全なワクチンだ。今ならギリギリ定期接種として受けられるので、もしものときの補償も全然違うから、今受けておくべきだ。」と強く勧められ、結局、2017年の10月と12月にガーダシルの接種を2回受けました。

1回目接種の直後から副作用が出ていました。でも医師は「たまたま風邪症状か何かと重なっただけで、このワクチンでそんな症状が出るはずがない」と2回目のワクチンも打ったのです。2回目の接種の後には、1回目と同じような症状が更に酷い状態で現れました。発熱、ひどい頭痛、腹痛、全身の痛みやかゆみ、3日目には体に虫が這いずり回って気持ちが悪いと発狂したように暴れました。全身の湿疹でただれ、顔は腫れて口も開かないほどでした。そこで初めて医師は「信じられないけど、副作用を疑うしかないし、3回目は怖くて打てないから。だけどこれ以上ひどいことには絶対ならないから安心するように。」と何度も念押しをされました。

後で知ったことですが、医師から保健所への副作用の届出は、皮膚の症状が治った時点で軽快とされ、また、私達の方に保健所から個別の問い合わせも一切ありませんでした。

しかし、間もなく、睡眠障害や生理もおかしくなり、動悸、息切れ、めまいも頻繁に起こり、進学校でも成績上位者だった娘が、簡単な計算を間違え、字も読めないし、書けなくなり、ひどい頭痛や吐き気、音、臭い、光などに過敏になり、生活に支障が出だしました。2年に進級したばかりのある日、学校へ行こうといつものリュックを背負った途端、うしろに崩れるように倒れたことをきっかけに、体調は急速に悪化し、以降、朝にベッドから自力では身を起こすことができなくなりました。

ある朝「目が回る。変だ。」というので、様子を見に行くと、信じられないスピードで娘の目玉がぐるぐると回っていて「もうこれはワクチンの協力医療機関へ受診しよう」と決心し、紹介状を書いてもらうために接種医を受診しました。

そして、協力医療機関を受診しましたが、先生は協力医療機関に指定されていることをまず知りませんでした。また、「今まで1人の患者を見たこともないし、治療しようにも診断基準もないから、近医と同じように対症療法でしかできない。」と言われました。これでは受診の意味がありませんでした。

娘は、時には「生きているのがつらいから、どうか殺してほしい」と私に懇願し、私も毎日が後悔の日々でした。現在も体調は安定せず、普通の生活とはほど遠く、将来の見通しも全く立たない状態です。